

歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第五巻「文化財編」を刊行しました。第一章／美の香り、第二章／匠の文化、第三章／住の演出、第四章／地に根ざす、の四章からなる内容の一部をご紹介します。各公民館や教育委員会において一冊四、〇〇〇円（税込）で販売しています。ぜひお買い求めください。

職人たちは、鉄砲の様式を規範として踏襲しました。



▲朱漆塗掬碗

第二章第三節では「多彩な技術と知恵 工芸品」と題して、日野町内の神社や寺院、個人で所蔵されている工芸品を取り上げました。

町内各所には貴重な品々が数多く残されており、日野町は工芸品の宝庫といえます。今回の文化財編では、懸仏・鰐口・梵鐘・神輿など社寺関係の品々のほか、日野鉄砲と日野碗を取り上げ、その特徴と歴史について紹介しました。

篤き信仰心と匠の技

町内には古い歴史をもつ社寺が多く、信仰の拠り所として様々な工芸品があります。その中から、



▲金剛定寺金銅地藏菩薩懸仏

代表的な逸品を見てみましょう。

まず、人々の信仰心を表した工芸品として、懸仏が挙げられます。これは円形の銅鏡に仏像を線刻し、長押や柱に懸けたものです。その中でも、金剛定寺（中山）の金銅地藏菩薩懸仏は、県内最古である鎌倉時代前期の作品として知られています。

参拝の際に打楽器として使われる鰐口にも見るべきものがあります。熊野神社（熊野）の鉄鰐口は、全国でも珍しい鎌倉時代前期の作品と考えられています。安部居には、元享元（一三二二）年に製作された銅鰐口があり、鼓面の圏線などに平安時代の様式がうかがえます。

また、梵鐘も工芸品の一つです。残念ながら、戦時の金属供出で多くが失われましたが、興敬寺（西大路）には、町内最古の承応二（一六五三）年の銘を持つ梵鐘が残っています。

ほかに、神輿からは金工・漆

工・彫刻師たちの素晴らしい技巧を見ることが出来ます。馬見岡綿向神社（村井）・比都佐神社（十禅師）・日枝神社（下駒月）には、江戸時代に作られた神輿が奉納されています。精巧で華麗な装飾類を見ると、職人たちの技量だけでなく、日野の人々の豊かさや篤い信仰心がうかがえます。

日野鉄砲と日野碗

さて、日野の工芸品で忘れてはならないのが鉄砲と塗碗です。かつては、日野の一大産業として隆盛を誇っていました。

日野鉄砲は戦乱の時代に生まれました。その起源は、蒲生賢秀公・氏郷公が活躍した一五六〇〜八〇年頃と考えられています。元禄元（一六八八）年の禁令により、生産が一時停滞しましたが、江戸時代後期になると、和田姓・小林姓をはじめとする鉄砲師が活躍しました。

日野鉄砲は工房ごとに製作年代を編年することが出来ます。作品の新旧はもちろん、銃床を作成する台師との関係や工房の稼動時期などについても知る事が出来ます。今回の文化財編における発見の一つです。

日野碗も鉄砲とほぼ同時期に産業化しました。分業体制が確立し、日野商人の活躍により広く普及しました。東北地方の「秀衡碗」を日野の古碗とみる説がありますが、日野商人が秀衡碗を買い取って、日野に持ち帰ったのではないかと考えられています。

現存する作品の多くは江戸時代後期以降に作られた無地の朱漆塗で、碗の腰を面取りした「一文字」と呼ばれる四ツ碗・壺碗・平碗の掬碗です。ただし、黒漆塗や漆絵・蒔絵を施した作品も幾つか見られます。